

優秀賞『他の何者でもない自分』庄山 真由

私は、戦いの只中にいる――。

私は、トランスジェンダー男性である。幼い頃から、「そんなことして！女の子でしょう！」「何で自分のこと、いつもオレって言うの？」こんな言葉がいつも私に浴びせられる。私の日常はこのつらさとの戦いである。そして、現在の最大の問題点が制服である。私の通う高校の制服は、有名デザイナーの作で女子の制服の人気の高い。しかし私にとってはこのカワイイ制服を着るのが苦痛なのだ。

これ以上我慢できない私は、戦いを始めた。女子の制服にズボンを加えることを学校に認めさせる活動だ。まずは自分の考えの妥当性の確認から始めた。ネット上で私の主張、つまりジェンダーの問題からの制服の在り方についての考えを示し、アンケートを実施した。その結果、校内外を問わず多くの人々の協力があり、回答も賛同の意見が大半を占めた。

これらの意見を踏まえ私は、学校の先生に相談をした。しかし先生は、「今は忙しいから…」と議論することなく私の前から立ち去った。そこに見えたのは、ジェンダーの問題を議論するのを避けたいという本音だった。

このことがあってから、私は改めて考えた。もっと手前の、もっと大きな問題こそ解決しなければならないという思いが次第に膨らんできた。仮に制服の問題が解決できたとしても。ズボンを履いて学校に行けたら、私の悩みは解決するだろうか。答はノーだ。根本的な問題は何も解決していない。仮にこの制服の問題が解消されても、新たな問題は次々と現れるはずだ。

ジェンダーの問題は、意識の問題である。男である、女であるなどという問題は、全くもって個人の問題であり、加えて、性のことなど誰も何も意識しない社会の構築ができれば、それが問題解決なのである。私は将来、教師を目指している。この問題の解決については、“個”の認識について成熟している欧米の社会にヒントがあると考えている。今後、留学を含めグローバルな視点を学び、教育の中でこの問題に向き合い、より多くの人々に対して働きかけたい。恐らく長く困難な戦いになると思うが、この方法に賭けてみたい。

このような私に強く影響を与えた人物がいる。新島八重である。彼女の人生こそ、まさに戦いの人生である。戦争が始まり、自ら戦闘に赴くと決めるや否や髪を切り、銃を持ったという。この時八重は、自らを男性として自認しての行動ではなかったろうか。また、日清・日露戦争の時は、看護婦として傷病兵の看護にも奔走した。その時の彼女は母性に満ちた慈愛深い女性であったと思う。何かを目指し、成し遂げようとする時には、性の認識など大した問題ではない。男であろうが女であろうが志には関係のないことだ。要はここに自分という存在がいるということである。他の何者でもない自分が、自分らしく生活できる社会の実現を目指し、八重のように戦っていきたい、これが私の志である。